

30319

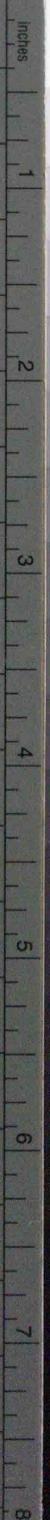
教科書文庫

3
820
41-1901
2000.3.23.27

Kodak Gray Scale

© Kodak 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

**Kodak Color Control Patches**

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

中等漢文讀本**卷四**

中等漢文讀本
卷四



4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

資料室

325-3
Koll

中學校漢文科用

明治四十三年一月廿八日

文部省検定済書

國語漢文研究會編

中等漢文讀本

東京

明治書院

中等漢文讀本卷四目次

神武建國

東京

大阪

京都

蟬丸彈琵琶

義光授祕曲

逆櫓

腰越狀

靜

國學

釋契沖

賴 賴 賴 賴 賴 賴
大槻修二 大槻修二
大槻修二 大槻修二
大槻修二 服部元喬
服部元喬 堤正勝
青山延壽 裏裏裏
角田簡 十六
一
三
五
七
九
十一
十三
十四
十六

二

紫文製錦序

宣長明邦典

湊河

題楠公訣子圖

格言 三則 書經

梨

要言類纂

柑類

要言類纂

外來物產

檜虎之法

博物新編

象

博物新編

熊說

駱駝說

題小金原捉馬圖卷

貝原篤信

二十六

齋藤馨

二十八

齋藤正謙

二十九

佐藤坦

三十

賴 襄

重野安繹

十八

齊藤馨

二十

松林衡

二十一

二十二

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

山内一豊馬を買ひし事

國文 藝翰譜

三十二

山内一豊買馬

國文

駢臺雜話

三十六

阿閉掃部

國文

駢臺雜話

三十八

阿閉掃部

國文

駢臺雜話

四十四

宇治河先登

國文

駢臺雜話

四十六

宇治河先登

國文

駢臺雜話

四十八

佐野了伯

國文

駢臺雜話

四十九

駿相紀行

節錄

五十

鋸山

國文

駢臺雜話

五十三

陶器

國文

駢臺雜話

五十五

離鶯說示塾生

國文

駢臺雜話

五十七

貓狗說

國文

駢臺雜話

五十九

小宮山友信

小宮山內膳論

格言 二則

書神谷生卷

兄弟止爭

格言 一則 孔子家語

以德化下

仁齋化賊

瀧澤馬琴

太田南畝

太田南畝

漢諺

十則

瓶わり柴田 國文 常山紀談

賴 裹 六十一

安積覺 六十二

佐藤坦 六十三

林長孺 六十四

六十五

青山延光 六十六

原 善 六十七

菊池 純 六十九

依田百川 七十

七十一

七十三

七十四

破缸柴田
松平信綱
江戸城
歌人幽古
東都花市
嵐山

大槻清崇 七十六
大槻清崇 七八八
鹽谷世弘 七十九
大槻清崇 八十一
長野確 八十二
大槻清崇 八十三



中等漢文讀本卷四

神武建國

賴 裹



元年辛酉春正月庚辰朔天皇卽位於大和檜原宮先是甲寅歲天皇在日向高千穗宮會諸皇族議曰此瑞穗之國我祖宗之所受於天而運屬草昧居此西偏多歷年所顧此四方未霑王澤遂使邑有君村有長各相陵轢莫之能統一吾聞東方有美地山岳四周足以恢弘大業有饒速日命者稱出我祖支屬爲長髓彥者所推先據有此吾將掃蕩之定都焉遂經營四方也十月親

將發日向至速吸門得珍彥收爲鄉導十二月至安藝居埃宮乙卯歲入吉備居高島宮備舟楫蓄兵食

戊午歲二月航抵浪速溯流至河內赴龍田路險隘乃東由生駒山入大和長髓彥邀擊我軍于孔舍衛阪我軍不利皇庶兄五瀨命傷於矢薨乃退還示弱轉由紀伊入高倉下武津見等歸順以爲鄉導歷熊野之險出菟田縣道臣命爲先鋒誅兄猾破八十梟帥于國見岳斬之又用珍彥計設疑兵殺兄磯城遂進攻長髓彥饒速日殺長髓彥來降時冬十二月也己未歲分兵誅諸窟居賊盡定大和相畝傍山東南爲國之奧區定爲都

焉至是卽位立正妃媛蹕輔爲皇后事代主神女奉三種神器於正殿曰劔曰鏡曰璽以天種子命天富命主祭祀掌朝政可美眞手命率內物部衛宮中道臣命率來自目部護宮門可美眞手饒速日之子也

東京

大槻修二

明治元年七月詔曰朕今親裁萬機綏撫億兆江戶東國大鎮四方輻湊之地宜親臨以視其政自今以江戶爲東京是朕所以海內一家同視東西也

京之爲地西北高陵東南平衍帶大河枕內海戶口百萬通計其街衢則及二百里程之遠云市分爲十五區

宮城在京之正中。其周郭內曰麴町區。郭東曰日本橋。以南爲京橋。爲芝。以北爲神田。爲下谷。大路貫通五區。塵肆綿瓦數里。下谷有上野公園。其東沿隅田川處。曰淺草。此區亦有公園。河東分本所深川兩區。此水昔時爲武總國界。故中央大橋。曰兩國橋。

芝浦沿海濱鐵道敷焉。公園設焉。區西爲麻布赤坂兩區。而北曰四谷。曰牛込。曰小石川。曰本鄉。麻布以下六區。通稱山手。即高陵之謂也。

天正十八年八月朔。德川家康始鎮江戶城。其後十四年開幕府。傳十五世二百六十餘年而廢。宮城實爲其

西城之墟。當幕府盛時。海內侯伯皆置邸第。重門連甍。及陞爲帝京。院省府署。大小學校。輪奐壯嚴。更改其觀。

大阪

大槻修二

國不富則兵不強。富國之道。在勸農工。農工賴商以通其貨。大阪百貨之府。大賈之市。其所由來蓋久遠矣。三韓朝貢以來。舟運之利大興。仁德帝有見于此。相地難波津。始建都制。置外館。即是地也。中世尚有攝津職。凡海路出入京師者。無不經由。其後舟泊或移神崎。又轉界浦。共爲附近之地。及豐關白築。大阪城遠邇商估。張肆城下。遂爲熾盛大都會。于今三百年。市人轉難波。

故安京トモ

舊名又或稱浪華。

市分東西南北四區跨淀川下流常呼大川架三大橋其下分爲安治木津兩川其河口共海舶所麌聚也一條長渠貫通南北曰東橫堀曰西橫堀其他有長堀道頓堀江戶堀土佐堀等而兩橫堀之間街衢井通太似西京但憾道路狹窄耳。

大阪城深塹高壁置第三師團造幣局在大川北岸停車館有四其在梅田者通西京及神戶也近來工業盛行煙突林立常見煤烟漲天。

市人營營趁利殆不省其他故世人往往有鄙焉者然

是千餘年來習俗而素封家之多職此之由夫呶呶者恐失其當。

京都

大槻修二

京都平安爲正稱桓武帝建都于此詔曰山河襟帶自然作城宜改山背國爲山城國又子來之民謳歌之輩異口同辭號曰平安京今宜從之是也近來稱西京蓋對東京言之也。

連山三圍真如詔辭而其中頗曠敞有兩水鴨川稱東河桂川稱西河兩水之間平坦三里是平安京之所建也。

都城之制。東西一千五百零八丈。正中通朱雀大路。以分左右京。其兩極界。俱稱京極。南北則一千七百五十丈。畫爲九條。然右京早廢。第宅市坊逐年興于東河。東以至今日。故朱雀却爲西京極。東京極殆當中央。亦可以見此市沿革也。

市坊井然。縱橫如棋枰。是尙存延曆遺制也。三條大路爲上京下京兩區經界。皇居在一條。二條城爲離宮。停車館在七條。三條。四條。五條各架大橋。鴨川左右爲繁華之域。東山三十六峯。連其上。山紫水明。是此都之所以冠絕四方也。

奠都千有餘年。宮祠寺觀甚多。然數遭祝融之災。存者殆希。係其七百年前經營者。僅有三十三間堂。六波羅密寺等數字耳。

蟬丸彈琵琶

服部元喬

逢阪盲人蟬丸。妙於琵琶。而高棲世外。人不得傳習。曲有流泉啄木殊祕。不常彈。無能聞者。王孫博雅。素精琵琶。恨未得祕曲。常憂此盲一逝。永自此絕。乃試造一見。無由發言而還。爾後每夕密往窺聽。三年未嘗有彈。值中秋月陰。風淒。蟬丸忽彈一曲。博雅心中悶癢。冀及祕曲。少頃蕭然嘯咏。且歎曰。嗚呼無其人哉。當此寂寂。誰

當共靜夜思以語其志者博雅應聲出乃通名且具陳向來事蟬丸感歎終夕晤言取祕曲悉授世乃稱蟬丸隱趣博雅好事至今

義光授祕曲

堤正勝

源義光稱新羅三郎賴義子也爲右近衛尉義光素好音學笙豐原時元時元有祕曲曰大食調入調其子時秋尙幼祕曲未可授焉乃授之義光之兄義家擊清原武衡不克義光聞之奏請赴援不許義光舍官赴之時秋追至請與俱義光謝之不肯至足柄山辭喻再三猶不肯去義光忽悟乃出大食入調譜示之曰子送

我必以此也時適月明義光吹笙盡授所學而別

逆櫓

賴襄

源義經數請征南海後白河法皇以京師多賊黨不許許先遣其將校義經奏曠日彌久範賴糧盡東歸而鎮西兵士寢屬平氏則勢難拔也乃許之義經乃戎服抵法皇宮白曰自平氏奔竄關西奪官稅亂官民三年于此臣旣奉追討之命鬼界高麗究其所至鑒之而後已否者不復入王城矣文治元年二月發京師于渡部東兵不習水戰人人自危梶原景時曰請爲逆櫓義經曰何謂逆櫓曰舳艤皆設櫓進以舳退以艤義經曰求

進而退。兵之通患。乃欲求退乎。曰。宜進而進。宜退而退。良將也。有進而無退。野豬而介者耳。義經變色。曰。豬乎。鹿乎。吾不自知。吾唯知進而勦敵爲快而已。公若爲大將。逆櫓千百。聽公所爲。若義經則不欲也。衆目笑景時。景時慚恚。

腰越狀

賴襄

源義經東獻俘鎌倉至腰越驛。賴朝不許入。使時政出受俘。義經乃寄書於大江廣元。自訴曰。義經代征討之勞。上夷國賊。下雪家恥。心竊期褒賞。不圖忽蒙讒言。曠日於此。莫以自明。徒涕泣爾。將永違恩顏。骨肉誼絕。自

非先人之再生。誰爲分疏焉。義經幼孤。從母逃匿。流寓諸國。爲氓隸所役。未嘗一日安居焉。然而幸慶忽會。至忝重任。或策馬峻坂。或凌風大海。不敢顧軀命。欲以慰冤魂。伸宿憤。豈有他哉。既辱五位尉。榮顯何加。而忽遭此厄。憂深悲切。敢上誓書。要之百神。而威猶不震也。不得不仰公之救護。伏願乘間進說。庶幾亮其無他。卒被恩宥。得享終身之安。不報。義經怏怏而西。

靜

賴

裏

初義經姪靜。從匿吉野。義經諭之。訣別。使僕齋資送歸。京師。僕奪其資。棄靜。靜獨行。風雪中。爲山僧獲。致於北

條時政送之鎌倉詰義經所在靜固陳不知以其有妊留之夫人政子聞其善歌舞欲一見引病不往賴朝夫妻詣鶴岡祠召靜命舞垂簾觀焉靜固辭強之再三乃起上塲工藤祐經撾鼓畠山重忠擊銅拍子靜整衣而進唱離別曲又作歌言慕義經意皆垂泣賴朝變色曰賤婢不冇頌我而敢慕亂人欲誅之政子諫止賜纏頭罷之已而分身生男安達清經受命奪而戕之靜見放還政子厚賜遣之

國學

青山延壽

古者和學之名無聞者何夫所謂和學者在知古言講

古典也已。皇朝之盛也各有其職固不待在野之人鎌倉以後武斷爲政不知文物典章爲何物況於古言乎。元和建臺以來始有講古言古典者。講古言者以釋契冲爲首唱繼之有加茂氏。有本居氏於是和學之名始成。然推本言之講古言者以水戶義公爲始。義公苦萬葉集難解託契冲爲萬葉集註解。契冲爲作代匠記。是契冲註解出義公慇懃也。若夫講古典者法印夕庵憾禮樂舊典廢勸織田公興之公乃使夕庵及菅屋貞賴掌焉。其後義公恨古典廢缺命其臣選禮儀類典因是廢典再興焉。所謂講古典者亦宜以義公爲始也。

釋契冲

角田 簡

釋契冲。字空心。俗氏下川。攝津尼崎人。生五年。母間氏口授百人一首和歌。旬日能記。父亦試讀實語教。不日復記。父母駭異焉。既長。勤苦勉勵。其學無不覩。所攻擊辯論。雖當時宿學。不能自解免也。又好國學。作和歌。其所發揮。識見卓絕。悉得冇緊。其說曰。和歌皆我邦語。而邦語有雅俗焉。有古今焉。雅俗也易辨。古今也難析。苟欲知古言。則萬葉集足以徵焉。是時水戸侯光圀。方恨萬葉集世無善注。其詞不明。慨焉有爲註釋之意。遙欽契冲聲譽。欲召託其事。固辭不就。而心喜侯之盛舉。爲

作萬葉集代匠記二十卷。總釋二卷。侯讀之大嘉其卓見。乃賜白金千兩。絹三十四匹。契冲悉散賑貧乏。修塔廟。一錢尺帛不蓄也。侯又讀古今餘材。抄益奇之。賜書召之。不應。及母死退院。卜居難波東高津。號圓珠庵。屏謝俗客。清修自適。著書十餘種。水戸侯贈問不絕。元祿十四年。年六十二寂。

紫文製錦序

賴 襄

吾所衣。和之衣也。吾所食。和之食也。和衣食而漢言語。問之和言語。則曰。不知。不知本哉。若人。予持此說。未有合焉。今得橋本子。蓋從伊勢本居子。而學和言語云。乃

抵掌而語。恨相得晚。一日謂我曰。源語和言語之尤美者。吾製而撮之。將資彼學。和言語者。子爲我序焉。吁。襄也。有志於和言語。而未能也。負於和衣食久矣。今安序焉哉。特喜橋本子之勤於和言語也。乃復以漢言語。言其志之合者。而應之。

宣長明邦典

重野安繹

本居宣長。伊勢松阪人。常以究邦典。明古道。自任。謂古道之傳于今者。賴有古事記耳。因欲註釋以公世。患無良師。會加茂眞淵以公事來松阪。宣長往見之。執弟子禮。具陳其意。眞淵謂之曰。明古道。宜先究古言。究古言。

莫善於萬葉集。予專精萬葉。將漸及古典。今老矣。予年方壯。睟勉匪懈。必能成業。然事有先後。登高自卑。蹠等直前。竟無所得。子其記之。宣長服膺其言。鑽研攻苦。遂著古事記傳。四十四卷。經三十五年而成。時年六十九。淹博精核。貫穿古今。邦典因以大明。其見眞淵。前後一次。後惟寄書以質疑義而已。而言必稱師。終身不衰。論曰。邦典之學。釋徒有仙覺。契冲。祠官有荷田東滿。加茂眞淵。宣長出諸氏之後。集大成。後世戶祝而不衰。然當其生時。世以爲異學。衆口瞰譏責之。其所著玉勝間。言之詳。偉才卓識之人。不容於世俗。往往如此。

湊河

齋藤 馨

十一月朔至湊河。沙土乾淤無涓水。大抵中國至畿甸。河高於平地。當時無水。雨則溢。皆然。河北田間有楠廷尉墓。其地湮沒二百年。水府義公始立石表之。然貝原篤信。嘗過此地。欲建一碑。自恐僭分而止。作文記之。則事雖未成。實在義公前。尤可尙矣。初余未識墓地。途間一農夫曰。楠氏墓安在。農夫作色曰。嘻。子無禮。何不稱楠公也。余爲之慙汗。因歎公德入人之深也。生田祠見。箇簾梅。即梶原景季插簾之遺種。其北得曳布瀑。上下有二瀑。上者大。下者半之。一名源平瀑。以地有事于源雨至。不果。

題楠公訣子圖

松林衡

戎衣軍裝。齡可五十左右。踞胡床。如有所指授。而垂髫童子俯伏其前。飲泣者。此爲楠公櫻井驛圖。干支係延。

元丙子而小楠公之舉義在興國庚辰終能奉其遺誠。公亦含笑於泉下矣。千載之下觀其圖者誰不感憤激勵過其地者誰不徘徊顧望而悽惻。余之東遊乘月溯淀河望見一小村落於水烟鬱鬱中舟人曰此櫻井驛然終不果往是爲遺憾耳。

格言 三則

爲下克忠。

以孝事君則忠。

世篤忠貞服勞王家。

書 經

梨

要言類纂

梨宜西北高東南濶風氣暖和之處好真土而不厭廣斥壘土尤宜人家近傍接擣種皆可其苗徙植者至葉落時以利刀斫之根上二寸炭火燒之明年芽生三年結實播種非此不榮接縛及立春芽將生斫南枝供其用擣插至春分斫南枝一尺五六寸剗本末炭火燒之插肥地上覆細土壓鎮薦遮陽光燥澆米泔乃易生并以大寒耕耙根傍澆乾鱸水乾鱸水即用乾鱸末一斗和水三斗經數日者枝直長則不實宜勾之以繩橫縛或縛石垂之亦可貯梨子鑿地鋪枯葉擇不傷損者並鋪上覆物或與蘿蔔同貯。

柑類

要言類纂

柑類好暖。孟春擇軟沙及肥沃墳土疏種覆土厚四五分。至霜降行避冷法。明年春分後徙植宜肥沃山田。若赤土多方石其墳土要和軟沙植後穴根傍一尺盛糞。土有蟲用銅線刺之或用艾葉和硫黃焚殺之木生孔則用硫黃和埴土塞之或削杉樹釘之。自寒候至春分用乾魚等培養至拇指大接之。凡柑類幹小者宜架棚防寒大者用藁薦等輕輕圍幹盛糰根邊至春分除之。後十餘日耕耙根傍澆糞覆土柑類下種青芋落菜。蘿荷野蜀葵等物皆能繁榮。柑類花落者拾聚製香水。

甚美。

外來物產

貝原篤信

本邦上世無菊故萬葉集不載詠菊歌古今集昉有詠菊之歌源順和名鈔不載於砂糖蓋夫時砂糖未來于我邦下學集節用集既載之則三百年前所來也。老學菴筆記曰砂糖中國本無之唐太宗時外國貢至自是中國方有砂糖然則來於本邦亦是可當于唐宋之間如蕃椒文祿年中豐臣氏伐朝鮮時其臣庶自彼土初携來故俗謂之高麗胡椒如木棉種子亦文祿時自外國來烟草種子亦然西瓜寬永末年來如秋海棠正保

年中來。如椿樹。本邦初無之。寬文年中自漢土來。樗亦椿類。是本邦素所有也。如臘梅。茶蘭。千日紅。美人蕉。皆近年自外國所來也。

擒虎之法

博物新編

印度國擒虎之法。或以樹膠濃糊落葉密排于草地之上。中置小狗。虎聞吠喊即來。攫食膠葉遇觸則粘。虎被糊口。眯目。愈動愈多。竟不能脫。獵戶遂從而刺之。又法以竹織一疎籠。人臥其內。並携一犬。虎至。撲索即以銳矛透欄刺之。又法以木桶作鞍。駕于象背。桶中置火鎗長矛。二三人伏于其內。直抵巢穴。象助以足。人彈以鎗。

一日之間常有獵十餘虎者。

象

博物新編

象性馴良靈敏。實爲諸獸之冠。但不可激其怒。怒則報復。嘗有一成衣店。諸縫工圍牀製服。適有過象止于其門。象偶置鼻于縫牀之上。縫匠戲刺以針。象忍痛不怒。隨路吸含穢水。比返即以穢物噴噀縫人。舉市皆大笑。又有一怒象。性烈而狂。逸欄逃出。路人懼走。内一婦忘抱其兒。衆各爲婦驚憂。以爲必死于象。迨象行近。反以鼻抱兒。置于路石之側。衆問其故。蓋婦以賣菜爲生。每遇象過。必以餘菜飼象。故象怒亦能記其德也。又有

某奴悞拂象性。象怒殺之。奴婦抱子哭訴于象曰。吾夫屈身作牧。只爲家貧。今汝逞此狠毒。使吾母子無所歸依。汝旣殺其父。請並殺其子。話畢。委兒于象下。象俯視良久。以鼻捲兒置坐項間。意欲以兒代父作牧。後象主果任其兒。其象亦比前較馴云。

熊說

齋藤 馨

西土之獸。猛莫如虎。而我無有也。我之獸。號爲猛者。熊耳。熊藏於穴。春出冬蟄。人欲捕者。積薪於穴口。熊便怒。取而移之於尾。復積之。亦如初。久之。穴中皆薪。熊無所踰伏。全身皆出。人擒縛之。擗殺之。向使熊深居穴中。則

雖有孟賁之勇。烏獲之力。孰敢擗之。今乃不勝一怒。致失其所而死。於山野匹夫之手。良可悲已。然彼獸也。無足言者。獨恠世人所爲。亦有類是者。何哉。熊雖死。皮爲茵褥。膽爲藥餌。尚足適用。人死骨朽。肉爛而止。是乃熊之不若也。噫。

駱駝說

齋藤正謙

駝之爲物。其大倍蓰。牛馬頸長。腹脹。背有兩峯。腳三折。長鬚而非馬。岐蹄而非牛也。近西洋人貢之於我。我邦人少見多怪。初駭其詭異。終笑其癡癡。紛然喧於都市。云。吾聞駝之在西域。能察熱風。能知伏流。能負千斤之

重日行七百里之遠。其能過牛馬遠矣。西人常資以爲用。唯見其材能。未見其詭異也。今來在此地。殊而用異。徒充詭觀。遂嗤笑之。不亦冤乎。嗟呼。以出群之材。居非其地。用違其性。終身默默。不得自效。而爲世人之笑者。皆駝類也。悲夫。

題小金原捉馬圖卷

佐藤坦

總之野。曰小金曠衍數十里。渺茫無際。官放牧龍種。年以蕃息。今不知其爲幾千百群也。每歲十月。牧長率其屬驅而捉之。年有定額。捕捉之所。四面起壘。高二丈餘。區爲内外。內小外大。皆缺前面。先期數日。所在發丁。自

數里外而驅之。柵斷奔路。使其可嚮入而不可外逸。迨期。牧長秉麾而騎。其屬亦皆騎從。遙見馬之所聚。則雖林莽之鬱密。藪澤之深阻。無不縱橫出沒疾呼而從之。丁夫數百人。作聲掀手。應指揮而驅之。初馬之爲群。不過五六。若七八。而見驅迫。歛成數十百。奔騰驚逸。響動萬雷。使其避之無地。皆入外壘。有一人持竿索。二人徒手從之。擇其可捉者。驅諸內壘。突入索約其頸。駭懼之際。一抱頸。一掣尾。合勢踏之。直以大索絡之。其可留爲種者。印烙放去。蓋捕捉之術。在於脅制其氣。使蹄噉之不暇也。嗚呼可謂巧且熟矣。鑑海世子。以壬戌之十月

往觀歸而作圖寄余索字余亦嘗觀之今二十餘年尙記在懷乃題畧於卷首

山内一豊馬を買ひし事

藩翰譜

むかし一豊、織田家に出でて、仕へし初め。東國第一の名馬なりとて、安土に引き來りて、商ふ者あり。織田殿の家人等、これを見るに、誠に無雙の名馬なり。されども價餘りに貴くして、買ふべき人、一人もなく、空しく引きて歸らんとする。その頃一豊は猪右衛門と申ししが、この馬ほしく思へども、求むること、いかにも叶ふべからず。家に歸り

て、世の中に身まづしきほど、口惜しき事はない。一豊仕への初めなり。かかる馬に乗りて見参に入りたらんには、屋形の御感にも預るべき者をと、獨言いひしに、妻つくづくと聞きて、その馬の價いか計にやと問ふ。黄金十兩とこそいひつれと答ふ。妻とほどに思ひたまほんには、その馬求めたまへ。價は自分參らすべしとて、鏡の壺の底より、黄金十兩取り出だし參らす。一豊大に驚き、この年頃身貧しく苦しみのみ、多き頃には、この黄金ありとも知らせたまはず。いかに心強くは

つつみたまひけん。されどもこの馬得べしとは、思ひもよらざりきと、且は悦び、且は恨む。妻はのたまふところ理にこそ侍れ。さりながら、これはわれらが父の、この家に参りし時に、この鏡の下に入れ給ひて、あなかしこ、これ世の常の事に用ふべからず。汝が夫の一大事あらん時に参らせよとて賜ひき。されば家貧しく苦むなどいふことは、世の常のならひなり。これはいかにも堪へ忍びても過ぎなまし。まことか、この度都にて御馬揃あるべしなご聞こゆ。もしとまあらんには、

この事天下の見物なり。兼て又仕への初めなり。かかる時ならでは屋形にも、傍輩にも見知られたまふべき由もなし。よき馬召して見參に入れたまへと思へばこそ参らすれといふ。一豊やがてその馬を求む。程なく都にて馬揃ありし時、織田殿この馬御覽ありて大に驚きたまひ、あつぱれ馬や、名馬や、何者の馬ぞと仰せありしに、これは東國第一の馬なりとて、商人が引きて参りしが、あまりに價貴くして、誰も買ふこと叶はず。空しく引きて歸るべかりしを、山内が買ひ得て候

ひぬと申す。信長聞こしめして、價高き馬なり。當時天下に信長が家ならでは、買ふべき人なし、とて奥よりはるばる來りしを、空しく歸したらんには無念の至りなるべし。その山内は、年頃久しき浪人と聞く。家もぞ貧しからんに、買ひ得たることの神妙さよ。且は信長が家の耻も雪ぎ、且は武士のたしなみいとかしこしと、感じたまふこと大かたならず。これより次第に身を起しきといふ。

山内一豊買馬

大槻清崇

山内猪右衛門一豊始筮仕織田氏也。適有東國人來，販名馬者。安土諸將士皆驚其神駿。然爲價高之故。不能購也。販者將牽馬徒還。一豊見之。不勝流涎。歸家獨自嘆曰。痛哉貧也。我當事君之初。獲此名馬。以見主公者。不唯一豊一人之榮。抑亦織田氏之榮矣。其妻聞之。就問價。曰。黃金十兩矣。妻曰。夫君必欲獲之。妾能辦之。乃取金於鏡匱。致之一。豊且喜且恨曰。比來窮困之極。或恐及卿。顛覆而卿絕不言有金。何卿之忍耶。妻曰。夫君言亦有理。顧昔者妾之來嫁也。妾父自納之。鏡底戒曰。汝勿以夫家貧故費此金。必也有關夫君。一

大事。然後用之。妾聞近日京師有簡馬之舉。今夫君而獲此馬。是一世之榮。而所謂大事無乃此耶。是以敢爾。一豐泣而謝曰。卿之惠也。獄翁之恩也。遂購其馬。無幾。簡馬之期至矣。一豐乃騎而入京。風骨峻爽。奮鬚一嘶。信長望見大驚曰。猪右何所獲此乘乎。一豐具告其故。信長嘆曰。我家多士。而不能購一馬。洵爲上國之恥。汝落魄歸於我。乃能爲此非常之舉。以一洒我恥。武夫用心不當。如此耶。一豐釋褐五百石。於是增爲千石。遂以見任用。

阿閉掃部

駿臺雜話

秀康卿越前に封ぜられ給ひし後阿閉掃部とて、武功のほまれありし者を、厚祿にて召し抱へられけり。又、猶伊勢とて、これも、國にて、世祿の歴歴なりしが、嫡子に鎧の着ぞめせさせけるに、かの掃部を招待して、子に鎧を着することを、頼みけり、さて、饗膳いでて、祝の盃に及びし時、伊勢、今日は、愚息が鎧の着ぞめにて候ふまゝ、御身の御武功の事、御物語り候ひて、彼に御聞かせ候へといひしに。掃部いや某が身の上に、御話し申すべき程の武功も覺え申さず候ふ、されど、御望もだし

難く候ふまま、某一生の内に、武者振の見事ある士を、一人見申して候ふ、その事を話し申すべし。江州志津が獄の戦に、暮れ方に、某一騎余吾の湖のわたりを引き候ひしに、敵とおぼしくて、うしろより詞をかけし故、馬を引き返し候へば、その人申し候ふは、今朝よりかせぎ候へども、よき敵にあひ申さず候ふ、御人體を見うけ、幸とこそ存じ候へ。御不祥ながら御相手になり申すべしとて、進みより候ふ故、それこそ、こなたも望む所にて候へと、たがひに、馬を乗り放し、既に、槍をあは

せむとしけるに、その人、しばし御待ち候へ。今朝より雑兵を、多く、突き崩し候ふ故、槍よごれて候ふまゝ、槍を洗ひ候ひて御相手になり候はむとて、余吾の湖に槍をうちひたし、二三遍洗ひつつ、さらばとて、突き合ひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮れはてて、物のあやめも見えずなりぬ。その時、あなたより又詞をかけ、もはや、槍先も見えず候ふ。御残り多くは候へども、これまでにて候ふ、御いとま申し候ふべし。御名こそ承りたく候へ、某は青木新兵衛と申す者にて候ふとて、

某が名をも承り候ひて、この後又陣頭にて出合ひ候はば、たがひに人手には、かかり申すまじく候ふもし又、味方にて候はば、わりなく入魂致し候ふべし。そらばとて立ち分れしが、これ程見事なる武士は、つひに見侍らず、いかがなりはて候ふにかと、語りけるに、そのころ伊勢がもとへ、心安く出入する青木方齋といふ浪士あり。その日も來りて、勝手に居たりしが、この物語を聞きて、にじりいでつつ、掃部に向ひ、とても只今の御物語承り、今更昔を思ひ、涙を落してこそ候へ。その

時の御相手になり候ふ青木新兵衛は、はづかしまがら、われ等にて候ふ。かく申すばかりにては、うきたる事におぼすべく候ふとて、その時雙方の鎧の威、馬の毛色を、一一ひけるが、一つも違はずざりければ、掃部おどろきつつ、さては久しくて逢ひ候ひて、本望に候ふとて、手前にありし盃を、方齋にさし、これをしるしにとて、腰の脇指を抜きて、ひきけり。それより方齋が名國に高くなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にて召し出だされたりとぞ。青木の武者振

の見事なるは、さる事にて、阿閉が彼がことをいひ出でて、名のりあひて、よろこびしも、又伊勢が子の鎧の着ぞめに、掃部を招ぎて、子のためにとて、武功の物語を望みしも、いづれも、さしたる事にてはなけれど、そのころの士風、武を嗜みしことは知らるべし。

阿閉掃部

大槻清崇

越前侯秀康之就封也。聞阿閉掃部爲勳閥之士。以重祿聘之。猶伊勢亦越之世臣也。將爲其子行擐甲禮。請掃部爲賓。禮畢。置酒。伊勢謂掃部曰。今日豚兒擐甲之

初願子語當年武功以祝兒前程。掃部曰。吾豈有武功可語乎。無已。則有一焉。吾嘗見一士。武風最可觀者矣。賤獄之役。兩軍既散。吾單騎沿余吾湖而退。有一騎呼於後者。回鑣接之。則曰朝來所殮皆雜兵矣。不幸未遇好敵。觀子儀容。果非凡士。敢請一戰。決輸贏。余曰。諾。下馬。將交槍。其人曰。請俟之須臾。我槍嶼矣。沒鋒於湖。洗之者三。曰。可以戰矣。於是相鬪。雌雄未決。而日已昏黑。乃呼曰。可恨。槍鋒難辨。請期他日。子爲誰。身是青木新兵衛也。後日相見。戎間誓不付勝負於他人矣。揚鞭而別。吾結髮從軍。未嘗見從容整暇如此之士。言未畢。有

青木方齋者。自屏後出。謂掃部曰。側聽吾子話。懷舊之淚不能自禁。吾子亦不記乎。爾時與君交鋒者。卽此翁也。掃部拍掌曰。契闊久矣。今日相遇。何其奇也。乃舉觴。屬之。好以腰刀。由此青木之名。顯于一時。候聞而聘之。與掃部同其秩祿。

宇治河先登

賴 裏

源賴朝檄八州將士。西討義仲。徵兵聚者六萬。乃盡委之於範賴。義經因令曰。木曾阻我兵。必於宇治河。皆具善馬。可以騎渡。賴朝有駿馬二。曰池月。曰磨墨。梶原景時有寵。其子景季年少銳勇。於是請得池月。以先登。賴

朝曰。乞焉者多。吾不與也。顧範賴等戰不能克。吾且親往。此吾乘也。乃賜磨墨。諸將士皆發。

明日佐佐木高綱自近江來謁。賴朝問曰。聞汝在近江。盍直從軍入京乎。高綱對曰。臣從軍還學射。見君訣別。且奉指揮也。馳三日乃達。臣唯一馬罷不可用。故後期在此。賴朝喜。因謂之曰。汝能爲我先登。於宇治乎。曰。能。臣居河上。識其深淺也。於是遂出池月。賜之。高綱感喜。謝曰。君聞高綱未戰而死。則不能先登也。聞未死而戰。則先登者高綱也。拜舞而出。賴朝呼返。戒之。曰。景季等乞焉。而不與汝記之。對曰。諾。

宇治河先登二

時大軍陣于浮島原。景季視群馬無過磨墨者。牽而上高丘。誇示於衆。已而有大嘶聲。畠山重忠曰。池月聲也。何以至此。已而高綱僕牽池月至。過丘下。景季問曰。誰乘僕對曰。佐佐木氏之乘。景季大愠。曰。不圖公之視彼踰我。我寧與彼死。使公喪二良。卽扣刀要路而待。高綱望見之。謂其騎曰。彼非梶原邪。公之囑我殆爲是也。漸近。景季呼曰。四郎久濶。彼乘公所賜乎。高綱哂曰。否。吾患無善馬。欲就公廄借之。聞磨墨已賜於子矣。池月不得命矣。子且然。況於高綱乎。然君之事方急。不遑顧慮。

遂誘廄人竊之矣。後有責問。子幸救解之。景季色解。笑曰。悔我不竊也。乃與俱西。

宇治河先登三

範賴向勢多義經。向宇治。義仲聞之。議戰守。見兵千騎。乃遣今井兼平。山本義弘。拒勢多根井行親。楯親忠。拒宇治。撤橋板樹柵。張繩於水中。守之二十日。義經以騎二萬五千至東岸。戒居民避軍。而火其廬舍。以布陣焉。起櫓自登。具筆硯書將士功最。曰。將以報鎌倉也。將士皆奮欲戰。義經又發令。而軍囂。不聞令。乃取平等院鼓。搗於櫓下。一軍屬耳。義經乃令。二萬人中必有善泅。

者直前嘗之。我勇士緣橋架防敵勿使敵射我。泗者爭釋甲而沒。刀截其繩。平山季重濫谷重助熊谷直實等上架而射。射戰良久。有二騎鞭馬亂流而進。先者景季後者高綱。高綱自後給景季曰。子之馬條慢矣。景季駐馬約條。高綱則超乘而過。上岸自名。景季踵上。義經上功簿。高綱爲先登第一。景季爲第二。畠山重忠以手兵繼渡。行親射之中。其馬重忠泗而達岸。揮刀而進。北兵辟易。義經乃以全軍渡擊大破之。

佐野了伯

岡田 儒

佐野了伯。佐野城主。佐野宗綱弟也。削髮爲天德寺主。

天正十三年。宗綱沒無嗣。了伯欲以佐竹義宣之族爲嗣。其老大貫某。竹澤某等不冐。迎北條氏政弟氏忠立爲嗣。了伯怒去。如京師隱黑谷。及豐臣秀吉征北條氏。召了伯爲鄉導。招降佐野氏舊臣。時氏忠在小田原留守。將士皆應了伯。獨大貫氏不從。乃攻殺之。秀吉以了伯爲佐野城主。了伯辭之。請以富田左近將監。次子政綱爲宗綱後許之。了伯爲人智辯重義。嘗招琵琶法師演平語。曰爲我奏悲愴曲。對曰諾。乃奏佐佐木高綱宇治川曲。了伯愴然涕下。奏闋。又請一曲。奏那須宗高扇的曲。復愴然出涕。後語左右曰。前日平語於汝如何。咸

對曰。絕妙獨怪。二曲皆勇氣奮發。快人胸懷。而君獨悲之。何也。了伯歎曰。吾今而後知汝輩皆不足賴也。夫高綱所騎之馬。源右將不予以其親弟與其寵臣。而獨賜之。高綱。高綱矢右將曰。臣不先衆騎渡宇治川。不復生還。如宗高亦然。源判官熊貔之士。固不乏也。而宗高拔於衆。獨騎向海中。兩軍皆息戰觀焉。當是時。若射不中。宗高必割腹死。二子者先決之胸中矣。以是察其情。我安得不爲之悲哉。我臨戰常以二子之心爲心。故聽其曲。不堪其感。汝等勇唯任血氣。非出其實。臨事豈足恃哉。

駿相紀行 節錄

齋藤馨

廿六日。登清見寺。瞰三保松原。蒼翠欲滴。蓮峯朗出于其左。寶一佳境。經興津上薩陀山。地高爽。與富嶽相對。俯則海波如玦。岳影落水。上下相映。自此至蒲原。稱田子浦。信東海道第一之勝也。過此則富士川。水勢急駛。舟渡極力。始達駿中。諸水皆泗夫駕人。而獨此有舟。以其急流不可用泗夫矣。

廿七日。早發。路行獄下。秀氣津津逼人。獄形玲瓏。自四面觀之。皆無不宜。而此間支峯複嶺。左右羅列。作拱揖狀。可以爲正面之觀。三島以東。獄麓已盡。函嶺又起。愈

上愈險。宿箱根驛。驛在嶺頂。又瀕湖水。夜寒甚。

廿八日。關門誰何極嚴。是爲海內諸關之最。四里小田原。北條氏五世所據。今爲大久保侯治城。北條氏因函嶺之險。以抗豐公。而舊臣宿將。既有送款於敵者。彼獨恃形勝。而不知人心之不可恃。亦可悲矣。經大磯有寺。爲鳴立澤。或云是伊勢豪賈某隱栖之地。謂西行遺跡。誤也。渡馬乳川。宿藤澤。

廿九日。南轉至畫島灣。廻沙平島屹立海中。有天妃祠。上下二祠。西又有祠。從其背降削崖。嵌巖海水拍激。得巨窟。安天妃像。其中深黑。導把燭而進。乃出取路腰。

越過七里濱。沙路前却。至鎌倉上長谷大悲閣。海島之觀頗曠。其下人家鱗列。爲雪下里。拜鶴岡八幡廟。殿閣輝煥。亦大祠也。廟東白田彌望。皆源二位及諸公邸址。其北林樹蔽虧。有二位墓。石塔一區。苔蘚剝蝕。有石燈。薩侯所獻。蓋以其爲遠孫也。二位貽謀不善。骨肉相屠戮。三世卽亡。而孫支據有西偏。至今不墜。亦意外之幸耳。有大江廣元島津忠久二公墓。修理改營皆薩長二公之所造。東行山勢逼隘。如束。曰朝比奈切通。蓋古時郭門之迹。四里入武爲金澤。

鋸山

齊藤馨

漸至鋸山之麓。老松劈岩而生。盤曲橫路。與石爭怒態。登數百步。則日本寺焉。見住僧。言談洒脫。亦佳僧也。有尾州僧。寓在數日前。伴予登山。曰山上之觀。萬廻不厭也。由寺右躋級。有洞窟。置開祖行基像。洞外深樹晝晦。上見巖懸垂。如簷宇。石佛列其間。三千餘軀。使人眼目頓厭。可謂佳人面上瘢痕矣。磐石橫前。鑿坎如甕。俯達其底。別一壺天。瀑布懸其側。天旱水涸。僅見泉痕印壁間。坐禪石在懸崖上。如蜂房燕壘。垂垂欲墜。有奇壁。指痕隱然。如或攫之。曰仙掌巖。巖下有一筭。老僧守之。自筭東登絕頂。有石藥師像。即光明后所置。爲日本置矣。

藥師之始。故寺以日本名。回顧東北。小湊清澄諸山。連綴稠疊。不絕。而三浦三崎。至浦賀。伊豆諸島。羅列其西南。與洲崎大房相當。市舍停舶。皆可俯拾也。仰則岳蓮秀出。天半雲煙護之。縹渺欲浮空而去。其他日光筑波與東南洋波。皆不逃於一矚。洵知十州一覽之名不謬矣。

陶器

重野安繹

陶器爲我國產之最。作之方細。碎粘土之精良者。及磁土長石。與水溶合捏和。隨意製形。納於窯以陶化。名之素燒。磁土狀如白砂。如單用粘土。則其形縮小。故必

加之。然二者粘合寡力。易致崩潰。故必加長石。長石爲熱鎔解。如飴。如硝子。能接合。粘磁二土。蓋陶器爲日用必需之具。故各地製造甚盛。多輸出海外諸國。其額與生絲漆器相比。素燒其觀不美。有存污點及浸染液體之患。故施之以釉藥塗之器面。再置窯中。陶成則釉藥鎔化。形制完具。陶器有繪紋。山水花鳥等。不一畫之。多先以色料繪素燒之面。後塗釉藥。

上古陶器。其製甚粗。類今土器。奈良朝時。僧行基始傳用釉藥之方。後五百年至鎌倉氏之始。加藤四郎左衛門景正者。游於宋。研究其術。歸。開陶窑於尾張瀬戸。後

又四百年。足利氏時。祥瑞五郎大夫。赴明修其術。迨還。開業於肥前唐津。豐臣氏之征朝鮮。肥前鍋島氏。擒良工。歸。起業其領土。其後各地陶窑繼興。其技益進。精巧迥出。乎支那朝鮮之上。稱爲萬國之冠。陶窑肥前伊萬里。尾張瀬戸。加賀九谷。京都清水。栗田尤著。備前美濃。會津伊勢質較下。而瀬戸自景正創業。凡七百年。地舊技熟。故其所製。色清白而質堅剛。價亦頗廉。最適衆人。需用。世呼曰。瀬戸物。以爲陶器通稱。

雛鶯說示塾生

柴野邦彥

籠養小鳥者。捕獲鶯雛。患其聲澁濁。就老鶯善鳴者。使

學其聲。俗謂之附子。雛初在籠。遷躍上下。踴然無少頃
靜。忽聞老鶯一哢。便戢翼凝立。如諦聽者。越時始能動
身。既而低弄。如學之者。又如羞澁。怕人聞者。如此。一兩
日。乃能放喉。縱囀。音響劉亮可愛。云。嗚呼。微彼小禽。尙
思好其聲。而知希賢。可以人而不如鳥乎。癸卯二月十
三日。聞之。神川生。書以示塾生。

貓狗說

賴 裹

貓捕鼠于內。狗警盜于外。各有其職。以事主者也。然諺
曰。畜貓三歲。三日忘惠。畜狗三日。三歲不失。而人常愛
貓。而疎狗。何哉。以其形體。則狗之粗。不若貓之膩也。以

其聲音。則狗之厲。不若貓之嬌也。以其性情。則狗之剛
決。不若貓之善柔。便辟也。是以貓之於主人。不離其左
右。出入其閨闥。食有魚。寢有褥。而狗則寢於土。而食於
餽。終歲不得望見主人之面。認盜而吠。無賞。縱鼠而不
捕。無罰。可悲也夫。

小宮山友信

賴 裹

武田勝賴之走入天目山。兵僅四十人。土屋昌恒。秋山
光次。牽其馬。阿部忠高。溫井常陸。擔槍從之。小宮山友
信單騎來。從友信初數諫。勝賴請除二嬖。又與小山田
將監者爭事。並訴。將監厚結二嬖。勝賴遂廢。錮友信。友

信於是赴難。追及於田野。就昌恒曰。君嘗擯我。而我赴君難。是傷君之明也。然不赴。缺我義。與缺我義。寧傷君明耳。因問長阪調閑何在。曰昨逃矣。問將監曰。逃已十日矣。曰唉。吾知有今日久矣。遂死之。

小宮山內膳論 安積覺

小宮山內膳剛直數忤。佞幸權貴。故勝賴惡之。及小山田將監忿爭。勝賴信讒。逐之。夫遭譏廢黜。而無怨懟之色。此固人臣之分。未足揄揚。而從容處之者。既鮮矣。至於放逐在外。而赴君之難。慷慨激烈。見危授命者。則千百人中。難得一二。豈非曠世義士也哉。語曰。疾風知勁草。世亂識忠臣。若內膳者。其可以爲人臣之勸矣。

格言二則

益者三友。損者三友。友直。友諒。友多聞。益也。友便辟。友善柔。友便佞。損矣。論語

責善朋友之道也。孟子

書神谷生卷

佐藤 坦

均是一甕水。樹樹而溉之。雖偏矣。而不足。一樹而溉之。雖不偏。而有餘。夫有餘也。有不暢茂。而條達者乎。不足以溉之。猶不溉矣。人之精力能有幾。而與夫一甕水。孰多孰寡。今以有限之力。讀無涯之書。吾見其難濟也。彼

其涉覽一過，即能至累數萬卷，亦不類於樹樹而溉之乎。不如儉其精力，有所擇而從事，而深造焉。其暢茂條達，可必也。今有人焉，其取友也汎，能記其名，能識其面而已。則無益於友矣。又有，人焉，其取友也寡，必其仁義人也。必其忠告而善導者也。則有，益於友矣。夫誦詩讀書，謂之尚友。盍以取友之心相比類邪。神谷生問讀書之方，書此與之。

兄弟止爭

林長孺

備前州有富民兄弟爭家貲者。黨援各百餘人。獄官推訊，累年不能斷。熊澤助八代爲獄官。乃召兄弟二人同

坐一堂。時冬日嚴寒，置一火爐于堂中央。終日無所問。及日暮，出盤殯。令二人並喫。如此者三日。而助八每隔屏障而坐。命其二兒執事膝下。二兒友愛如壠如篋。暗令二人聽之。二人心曉，其諭已愧心自然。繫胸初二人入堂，各分坐一偏。至是相謂寒甚，可近火邊。既近不覺相與執手號哭。宿怨頓消。乃退告黨援止訟。云噫夫數年疑獄，不勞寸舌。而一朝息之，可謂善聽訟者矣。然非其履行，有素取信於人。豈至如此乎。世之爲刑官者，其思之矣。

格言一則

孔子家語

與善人居。如入芝蘭之室。久而不聞其香。即與之化矣。
與不善人居。如入鮑魚之肆。久而不聞其臭。亦與之化矣。
是以君子慎其所與處焉。

以德化下

青山延光

貞觀十六年。備中守藤原保則。爲備前權守。務撫恤人民。一如備中時。僚屬有貪汙者。輒屏人謂之曰。君宜砥礪名節。勉取榮譽。何必終於一州小吏。但資財不給。所以取貪穢之譏。僕有薄俸。請給之。君慎勿犯官物。繇此吏民畏愛。呼曰。父母兩備。國界有吉。備津彥神。國有水旱。保則必禱焉。一時傳言。境內有爲惡者。神立降罰。以

助府君。境內益服。安藝盜奪。備後貢繢。至備前石梨郡而宿。問主人曰。此國太守如何。主人曰。府君化民專用仁義。一國莫不從化。若有奸濫者。吉備津彥神立降誅罰。德之感神。一至此。盜大愧。明日至府。自首乞命。保則召見。曰。汝能改過。非復惡人。即給糧食。封其絹。付盜。移備後國府。僚屬皆曰。恐不達彼國。保則曰。彼已悔悟。奈何疑之。盜持移文。果至備後府。守小野喬松大悅。遣盜至備前謝之。其以德化下。率此類也。

仁齋化賊

原善

伊藤仁齋。嘗夜行郊外。劫賊四五人。當路立。各按劍曰。

吾徒不醉不樂。今無酒資。客若缺腰纏。則自脫衣裳供之。仁齋神色不少動。曰。今日適無囊錢。敝縕袍脫以遺之耳。且問汝輩常以何爲業邪。曰。昏夜橫行掠奪以自給。是其業也。仁齋曰。以若所爲爲業。吾何拒焉。輒脫服以授之。將去。於是賊止。仁齋曰。吾儕草竊爲衣食數年。未嘗見舉止如客者。抑客何爲者。曰。儒者也。曰。儒者爲何事。曰。以人道教人者也。所謂人道者。孝於親。弟於兄。不可一日無者是也。人而無道。禽獸焉耳。言未畢。賊皆頓首涕泣。曰。囁君與吾鈞是人也。而事業之迥異如是。吾甚恥。願君宥吾儕罪。今而後飲灰洗胃。謹奉教于門。

下遂皆改心自勵云。

灑澤馬琴

菊池 純

灑澤馬琴。名解字瑣吉。號曲亭。武州江戶人。喜碑史野乘。名聲大彰。嘗屏居一室。潛思著述。意匠慘澹。沈吟久之。時正午下。偶家人令其下婢供茶。而馬琴一意攻苦。不知背後有人。獨語曰。今夜必縊下婢。掠奪其衣物。投屍于井中。以滅其跡。可謂妙計矣。因閣筆。微笑。婢側耳。于戶外聞之。驚悸。謂主翁欲殺我。及昏而遁逃。赤跣歸家。泣告其父兄曰。兒今日隔壁聞主翁獨語。命逼今夕。不速去。殆爲所魚肉。父兄色然。舍匿其家。託疾乞暇。

馬琴恠之。研詰一再。初首其所自。馬琴抵掌喻之曰。嚮者予著其碑史。命意沈吟。忽獲一奇趣。欣然不能自持。偶然上口。豈復有忮心邪。婢家父兄大笑。乃止矣。

太田南畝一

依田百川

太田覃。號南畝。幕府士人。好學善文章。旁作遊戲國歌。滑稽詼諢。雖村老野嫗。莫不絕倒。世所謂蜀山先生者也。家有老僕。曰逸助。質慤朴魯。南畝愛之。後授以本錢。營商自給。然逸助爲人迂鈍。動輒折閱。乃來乞哀。以爲常。一日復欲有所言。南畝笑曰。汝得非循例請資乎。逸助曰。非也。奴家壁剝落。欲請敗紙糊補之。南畝笑曰。甚

易。手攫几上所在書幅。付之。逸助拜謝而出。遇門人於途。門人見問之。逸助答曰。主人所賜敗紙耳。門人取視之。則文章詩歌。奇思橫逸。皆平日所未見也。乃走告之。南畝曰。渠自有福。子等欲之。求於僕可也。門人爭就買之。後至者。或并壁上故紙取去。逸助因獲十餘金。

太田南畝二

未幾資又盡。會孟蘭盆節。逸助傾囊造罩紙燈。往賣於市。不售。抵南畝求買。南畝曰。他物尚可也。若紙燈何所用。逸助跪乞不已。南畝曰。且取紙燈來。逸助盡致之。凡百餘。南畝命磨墨揮腕。疾書。每一燈題一詞。隨吐隨寫。

如出宿構頃刻而成。更作報單一通。文辭洒落。戲謔百出。命逸助致之。諸友副以紙燈。諸友傳觀。爭買之。尋常紙燈。直不過七八錢。以其出於南畝。昂五六十錢。遠近傳聞。至倍直。購之。逸助亦獲利十餘金。時有善戲文字一九者。號十返舍。素不識南畝。聞其爲人。欲見之。抵其門。門者通謁。久而不出。一九罵曰。南畝不過一賤士。亦驕人耶。不見而去。後遇之外。謂南畝曰。先生何爲困我。答曰。吾子何爲弄我。一九恠問其故。曰。某聞子名久矣。幸而見訪。欲一快飲。而適乏酒資。園有一桐材。鬻之。造屐匠。得數百錢。反求子。則無矣。豈非弄我乎。一九不能。

詰。

漢諺 十則

將飛者翼伏。將噬者爪縮。
好事不出門。惡事傳千里。
蹠馬破車。惡婦破家。
前車覆。後車誠。
百足之蟲。至死不僵。
枇杷黃醫者忙。橘子黃醫者藏。
鬻棺者。欲歲之疫。
人非義不交。物非義不取。

居必擇隣。交必擇友。

養子方知父母恩。立身方知人辛苦。

瓶わり柴田

常山紀談

永祿十二年、佐佐木承禎、柴田勝家が守る所の、長光寺の城を圍みて攻め、遂に總構をうち破る。勝家、本丸にありて、こゝを先途と防ぎ戰ふ。鄉民、佐佐木が陣に行きて、この城は、水の手遠く、遙なる所より、水を取り候ふ。それ、取りきる程ならば、城は保つべからず、と告げ知らせければ、承禎喜びて、水の手を取りきりたり。城中これに苦めども、

弱れる色を顯さず。

承禎これを見むために、講和にことよせて、平井甚介を使として、城中に入れたり。平井、勝家に對面して、手水を請ふ。瓶に、水の満ちたるを、小性兩人して、かき出だす。平井、手を洗ひければ、小性殘れる水を庭に棄てたり。平井、歸りて、かくといへば、事の違ひたる故に、怪みあへり。かくて城中、すでに水竭きければ、勝家、明日は、討ちて出でて、切死せむとて、諸士をあつめ、最後の酒宴をなす。殘れる水を問へば、二斛ばかり入るべき瓶を、かき

出だす。さらば、この間の渴をやめよとて、人々に飲ませける後、勝家、薙刀の石突にて、瓶を碎きた。夜明け方に、門を開きて、うち出づ。佐佐木、思ひもよらざれば、大に敗北しけるに、勝家、首八百餘級を得て、岐阜に獻ず。勝家は、猶長光寺に在り。信長感状を與へて、賞せらるること、大方ならず。これより勝家を、瓶わり柴田と、世に稱しけり。

破缸柴田

大槻清崇

永祿十二年。柴田勝家爲織田氏守長光寺城。佐佐木承禎圍而攻之。遂破其外城。勝家退保牙城。防戰甚力。

偶有人告佐佐木氏者曰。此城乏水。若絕其汲路。城可下也。承禎悅從之。城中果困。而未變其旗色也。承禎恠之。乃託和議。納平井某於城中。勝家將出接之。平井請盥。手勝家命盛水於巨盤。使二人左右捧而致之。平井盥訖。則棄餘水於庭。無復愛惜意。平井視之。色然而歸。既而儲水殆竭。勝家度不可脫。會諸將士。置酒。訣飲。時問所餘之水。則僅二斛矣。勝家呼眉尖刀。以其鐵鍊破水缸。以示必死。乘曉開門。呐喊潰圍以出。佐佐木氏兵以其出不意。狼狽擾亂。不可復止。勝家乘機衝突。斬首八百餘級。使人獻之於岐阜。信長大悅。賜勳狀。以賞之。

世呼勝家爲破缸柴田。

松平信綱

大槻清崇

酒井氏移封之後。伊豆守松平信綱代領川越。領內有野火止者。土瘠水匱。田里蕭條。代官安松金右衛門建議。曰。宜鑿新渠以引玉河。則水利疏通。稻田可以開矣。信綱問其所費。曰。當用三千金。信綱曰。顧吾亦非久于此者。然以三千金利乎後人。亦吾之職耳。乃命督其事。安松於是募役夫數百人。鑿渠十有六里。自小川村達新河岸。既成。而源水不至。渠中唯沮洳。信綱惄而詰之。安松曰。雖臣亦未解其理。且待明年。至明年。水尙不至。

信綱殊不平。讓安松曰。汝特不察地勢高低耳。安松曰。否。臣今而有所悟。古云。河潤九里。蓋川越之爲地。在武野曠漠之中。土燥風多。人家皆吹塵滿座。有客至必掃席。而後延之。而今年獨不然。加之蘿葛諸菜肥饒皆異平日。是知河潤入地數尺。而十六里之渠。有以暗助之耳。至其明年。果一夜大雨。有聲如雷。俄而奔流衝決。香魚躍上地。十六里間一時皆盈。以達新河岸。信綱惄然曰。安松經三年之久。不挫其志。洵有足感歎者。增之以祿若干石。後遂至顯職。

江戸城

鹽谷世弘

東照公之奠府江戶也。群下多謂江戶城者。古昔陪臣所建。規模狹隘。非八州太守之居也。城東澤藪接海蘆荻叢生。西北培塿坡陀。灌莽翳薈。渺無際涯。無地可以列邸宅。實塵肆。東照公相地增築牙城於中央最高處。以舊構處爲西城。闢西北爽垲地。鏟高墳卑。給庶士宅地。曰番町。開市塵於麴町。東南芟蒲葦埋洲渚。鑿川渠。架橋梁。淪淤塞流垢穢。荒蕪之地。坦爲車馬之衢。四達旁通。大城以正東爲正門。其東爲日本橋。四方里程。自日本橋始。海運船艦自浦賀入者。泊於品海深川。換艇舸以集於日本橋。百貨輻輳。萬物豐阜。自捷關原諸侯。

皆朝于江戶。賜第邸于郭內。商賈日益。儕集坊肆年增都下方四里。屋舍鱗次櫛比。至有土一升金一升之諺。而四郊新墾之野。皆爲沃壤。田疇棋布。聚落星羅。租賦之入十倍。往時皆揆之。創業之日而成算如合符契。

歌人幽古

大槻清崇

織田右府之遇弑也。筑前守秀吉既與毛利氏和。兼程東上。討逆賊光秀。逗姬路者一日。盡收金銀。以爲軍資。署分既定。是夕浴罷。呼堀久太語之曰。此城無用。守備也。吾將一擲賭天下。子以爲何如。久太曰。然。以僕觀之。潮候正好。勢不可不揚帆。有善和歌者。幽古進曰。譬之。

芳山花盛，開安得不一往而觀之。黑田孝高自旁贊曰。縱欲觀花時不至，則不能矣。今也風綻雨拆，自矯招人。時乎時乎，宜以此役爲觀花之始耳。

寧靜子曰。復讐之舉以順伐逆，天人所共與，誰能禦之。今觀三人之言，當時光景千載可想。其一戰鷹揚，勃然以興者，何足恠哉。

東都花市

長野確

東都花市甚盛。淺草寺每月十八日。虎門每月十日。麴坊菅廟。每月廿五日。春則梅柳桃李海棠牡丹芍藥。夏則荷花石榴燕子。秋則蘭菊木芙蓉。冬則水仙山茶奇

松怪竹。爭新競奇，種種無不有也。各盆植之，列置牀上。宛如錦繡。而又有不時之花。若海棠桃李。已以正月開花。然皆出於人力。非受天氣之正者也。其法陶盃植花木，藏之土窖中，周以草秸，而密墐之。最早開者，四周以火逼之使開也。又有以白梅爲砧根，而紅梅一枝接之。或以紅梅爲砧根，而白梅一枝接之。每盆一株紅白爭開者。謂之源平梅。蓋本邦武將源氏旗色尚白。平氏旗色尚赤，因以名焉耳。京師浪華亦有花市。然不如東都之盛也。

嵐山

大槐清崇

十八日雨。文政十一年三月齋藤履侯見訪。因議嵐山之遊。且舉予公事恐愆期。句示之。履侯乃曰。既已公事不可緩。一日也。遂俱衝雨而出。西行里餘。泥路甚艱。至帽子達遙認。嵐山松間時見微白。予始以爲雲。諦視則皆花也。急叫一聲。倦脚頓進。行逾近。花益明。既過嵯峨。則嵐山全現。蓋其爲境。峯巒秀出。萬松蒼翠。一水潺湲。遶其下。此其大勢也。而山櫻爭發。濃淡綺錯。其高者。帶長松之翠。低者。倒影清流。紅綠相映。粧點成趣。譬猶天生佳人。衆美皆具。而飭之以脂粉。宜古今艷稱。以爲一名區也。予也夢寐此境。殆十餘年。今而豁然醒。心日不亦快哉。遂投間也。

峽口旗亭引觴。滿酌頹然。旣醉。予揖履侯。曰。公事已了。請辭。乃餽筍輿而去。輿窓結夢。恍然猶在。山花泉石之間也。

中等漢文讀本卷四 終

明治三十三年七月廿二日
明治三十四年七月廿一日
明治三十五年七月廿一日
明治三十六年七月廿一日
明治三十七年七月廿一日
明治三十八年七月廿一日
明治三十九年七月廿一日
明治四十一年七月廿一日
明治四十二年七月廿一日

發行所

東京市神田區錦町一丁目
大坂市東區備後町四丁目

明治書院
吉岡平助

不許複製

明治三十三年七月廿二日
明治三十四年七月廿一日
明治三十五年七月廿一日
明治三十六年七月廿一日
明治三十七年七月廿一日
明治三十八年七月廿一日
明治三十九年七月廿一日
明治四十一年七月廿一日

著者

東京市小石川區原町百二十番地
國語漢文研究會

發行者

東京市神田區錦町一丁目十番地
三樹一

印刷者

東京市神田區錦町一丁目十番地
新井 豊造

印刷所

東京市神田區錦町一丁目十番地
明治印刷所

明治三十三年七月廿二日
明治三十四年七月廿一日
明治三十五年七月廿一日
明治三十六年七月廿一日
明治三十七年七月廿一日
明治三十八年七月廿一日
明治三十九年七月廿一日
明治四十一年七月廿一日

定價表	
一、二	各拾八錢
三、四	各貳拾二錢
五、六	各貳拾五錢
七、八	各貳拾八錢



